

その違いを述べます。
①「私の側」の違い
親鸞聖人は「いずれの行もおよびがたき身」と仰っています。私達はどうしても自分の力では仏になることができないのです。その私達を見抜いて「我が救う」と誓われているのが阿弥陀様の他力本願です。
相撲の世界では力士が努力を重ねて勝ち抜くことに意義があり、自身の努力抜きに他の力士を当てにするのは確かに筋違いです。その筋違いの世界と「努力しようにも努力できない私」を出発点として、阿弥陀さまの他力本願の境界とは根本的に違うのです。
②「相手側」の違い
阿弥陀さまは私達のことを「わがごと」として悲しみ、私達が幸せにならなければ、阿弥陀さまも世間一般で他力本願と使うとき、相手側はどうでしょうか。こちら側の幸せを願うどころか、しょせん「ひとごと」なのです。
にもかかわらずそれを当てにするようであれば確かに筋違いで、当てにならない筋違いの世界と、私達を救いたいと願われる智恵と慈悲の世界では、やはり意味合いが根本的に違うのです。
梅鶯仏社会員は正しく仏教用語を使いましょう。

題材法話

前号からの続き

「ひとたびおさめ取ったならば二度と離さない」との誓いが南無阿弥陀仏のご本願でした。

○名優「笠智衆」

笠智衆という名俳優があられました。「男はつらいよ」のご前様役でも有名ですが、木訥（ぼくとつ）とした台詞まわしに、なんともいえな味のこの方はもと小津安二郎という有名な映画監督に見出された方で、名作「東京物語」などに出演されて、素朴な人間味あふれる演技をされていきます。この技は全くの余談なので、これが笠智衆という俳優が、この笠智衆という俳優は、もうどうしようもない大根役者だったそうなので、と。ところが小津監督はなにかこの人に魅力を感じ、どうしたからこの俳優の味を出



せるのかと、色々考えあぐねられたそうです。色々ある時小津監督は、演技をすればするほど大根になるのだから、いっそ演技をさせなければどうかと考えられたそうです。ち台詞は感情を込めず、立ち居振る舞いの演技も最小限にとどめるといったことでした。そうしたら驚くほど味が出てきたというのです。少しでも台詞や演技に格好を付けたりなんぞしたら、こつぴどく叱られたそうで、それが後にはあれほどの名俳優に仕立て上げられたということがあるのであります。意外と世の中のことは、へたに感情を込めて言ったり、大げさに振る舞ったり、しない方が、本当の気持ちか、が相手に伝わりやすいのか、も知れませんがね。

○仏を捨てた「笠智衆」

余談はさておきまして、実はこの笠智衆さん、もともととは熊本の来照寺という



浄土真宗のお寺の出身なのです。そこで、20年ほど前の話なんです、西本願寺の関係大学であります龍谷大学の企画で、当時の千葉大学と笠智衆さんとの対談があり、その時、笠さんはこんなお話しをなされていた。笠さんが旧制中学を卒業して、お寺を継ぐために龍谷大学に入學することになり、熊本からはるばる京都の龍谷大学にやってきたそうです。当時の龍谷大学は、西本願寺の横にある大宮学舎だ（おもむき）の大学だったのです。その大宮学舎にあります本館の講堂、この建物は国の重要文化財なのですが、その講堂に安置してある阿弥陀様の前に立った時、急に逃げ出したくなったというのです。

笠さんのお父さんは大変厳格な方で、笠さんには小さいときから朝夕には本



堂でお経を読ませ、遊びに夢中になつて遅れたときには、鞭でお尻をぶったそうです。龍谷大学本館講堂の阿弥陀様の前に立ったとき、思わぬそのことを思い出し、京都にきてまで、またそんな厳しい生活を送らなければならぬのかと思うと、急に逃げ出したくなったというのです。そこでお父さんの意に背き、京都を通り過ぎて東京に出て、元手がいらぬからと俳優養成所に入り、それから俳優の道をひたすら歩んできたそうです。

○笠さんを捨てなかった阿弥陀様さま

その笠さんが対談の中で最後にこのようなことを仰つています。一60年経った今本当に思いますことは、60年前に私は自分のお寺の仏様と、龍谷大学の仏様を捨てました。しかし、仏様の方は私をお捨てにはならなかったのです。と。

梅鶯仙壮報恩講

住職法話より

